

米子市宗像 1 号墳出土遺物について

東方 仁史

〒 680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館

E-mail: higashikata-hi@pref.tottori.jp

Artifacts of the Munakata No.1 tumulus, Yonago-shi, Iottori, Japan

Hitoshi HIGASHIKATA

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

はじめに

今回紹介する資料は、平成 14 年度に当館に寄贈された、米子市宗像 1 号墳出土遺物である。同古墳の出土遺物については、これまで詳細な報告がなく、鳥取県内の古墳時代後期を考える上で欠かせない古墳でありながら、遺物からの位置づけがなされてこなかった。平成 15 年度に脆弱になっていた遺物の保存処理を行い、平成 17 年 4 月から常設展示で展示するのを機に、資料紹介を行うものである。

当館所蔵資料は、宗像 1 号墳出土遺物の全てではないが、内容を知る上で必要な資料が揃っている。本稿では、遺物の紹介を行い同古墳についての基礎資料とするとともに、若干の考察を加えていく。

宗像 1 号墳の概要

1 位置・墳丘及び石室

米子市街地の南東、法勝寺川と日野川の合流点西側の丘陵には、多くの古墳が存在する。古墳は丘陵ごとにまとまりをもっており、観音寺古墳群、東宗像古墳群、宗像古墳群と呼称している。宗像古墳群は 5 基の前方後円墳を含む 42 基の古墳からなり、丘陵麓には式内社宗形神社が存在する。

宗像 1 号墳は宗形神社の北、標高 38 m の山頂を利用して築かれた前方後円墳で、前方部を南に向けている。全長 37 m、後円部径 28 m、後円部高 6 m をはかる¹⁾。後円部に 2 基の横穴式石室が並んで造られてお

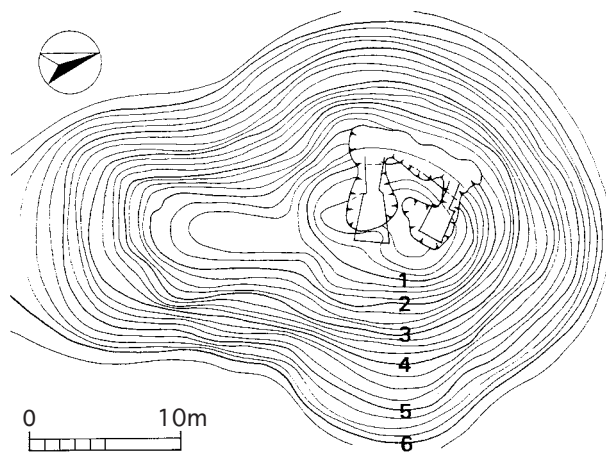


表 1 宗像 1 号墳埋葬施設の規模

	玄室奥行	奥壁幅	前壁幅	高さ	羨道奥行	玄門幅	羨門幅
A 石室	3.3	2.15	1.4	1.55	2.35	1.05	1.25
B 石室	2.3	0.95		1.1			

※ 数値は角田1985による。

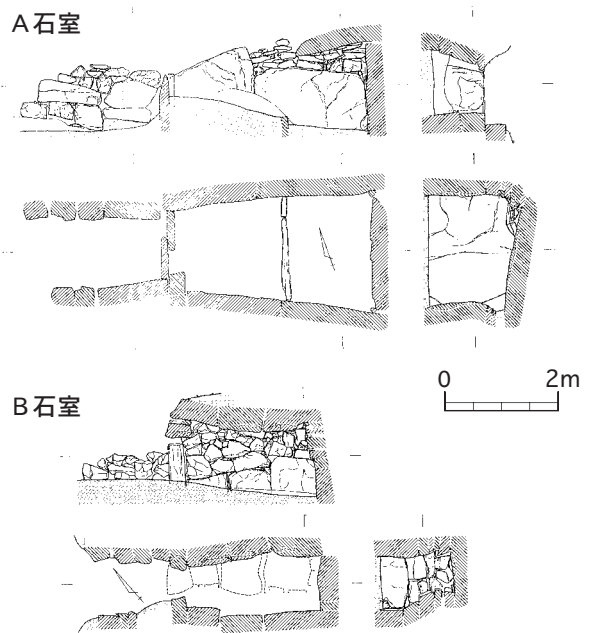


図 1 宗像 1 号墳墳丘測量図・石室実測図

り、前方部側のものを A 石室、もう一つを B 石室と呼んでいる(図 1)。

A 石室 平面形は奥壁側が広い羽子板状を呈す。奥壁は 1 枚の石で構成する。側壁は最下段に大型の石 2 個を使い、その上に板石を重ねる。天井石は 1 枚が残り、もう 1 枚が石室内に落ち込んでいる。床面は玄室中央やや奥よりに、奥壁に平行に 2 枚の板石を立て、内部を 2 つに仕切る。玄門部は両袖式で、板石を立てて外側から板石を用いて閉塞する。

B 石室 A 石室同様羽子板状の平面形をとるが、小規模である。奥壁最下段は 1 石、側壁最下段は 3 石で構成する。その上はやや厚みのある石を用いており、多いところで 5 段程度積まれている。天井石は玄門部も含めて 4 石で構成される。

A 石室は北部九州との関わりが考えられているほか、当地方で一般的な形態の横穴式石室は、A 石室のような石室を祖形とする(角田 1985)。なお、両石室とも 2002 年の鳥取県西部地震により崩壊している。

2 資料の由来

宗像 1 号墳は古くから石室天井石が露出していたが、昭和 27 年に石室が乱掘され、それを機会に、翌年佐々木古代文化研究室により発掘調査が行われた(鳥取県編 1972)。発掘された遺物のうち主なものは、昭和 47 年の当館の開館を機に常設展示に展示され、残りの遺物は佐々木古代文化研究室に保管されていた。平成 14

年度、常設展示されていた遺物が一括で当館に寄贈され、それを受けて平成 15 年度に鉄製品などの保存処理を行った。また、平成 17 年 1 月、佐々木古代文化研究室に保管されていた考古資料などのうち、鳥取県関係のものが一括して米子市立山陰歴史館に寄贈されており、その中に宗像 1 号墳出土遺物が含まれていることを確認している。また、同館では、以前から刀子・玉などが展示されている。

したがって、宗像 1 号墳出土遺物は、鳥取県立博物館と米子市立山陰歴史館に分散している状況にある。

出土遺物について

現在、宗像 1 号墳出土遺物として確認できるのは表 2 の通りである。乱掘を受けているため、完全な一括資料とはいえないが、かなり豊富な副葬品があったことが窺える。なお、遺物の出土位置は、遺物に注記があるものを除き、多くが不明である²⁾。

1 武器・武具

大刀(図 3 - 1 ~ 5)

大刀は 5 点存在する。いずれも石室内出土である。1 は鋒を欠くほか刀身に欠損部分があるが、ほぼ全形がわかる資料である。復元長は 1 m を超える。刀身は幅に比して厚さが薄い。関部は若干破損するが、残存部から撫角と確認できる。茎部は先端が細くなり、茎

表 2. 宗像 1 号墳出土遺物所蔵先一覧

種類	所蔵先	鳥取県立博物館		米子市立山陰歴史館		
		A 石室	B 石室	A 石室	B 石室	墳丘
武器・武具	大刀	5			3	
	鏑	3				
	円頭柄頭	1				
	鉄鏃	19			1	
	鉄矛	1				
農工具	刀子			3 以上		
馬具	鈴雲珠	1				
	金銅金具	4				
装身具	耳環	1		2		
	玉類	19		不明 3	10	
須恵器		35	2		3	
円筒埴輪		2		1		

は正確な数量が未確定のもの

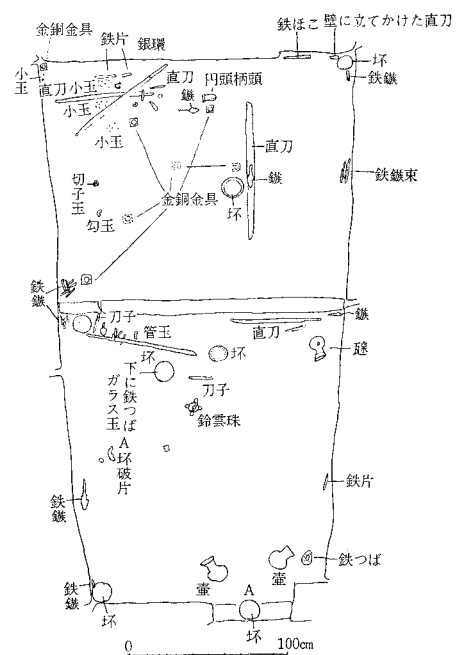


図 2 A 石室副葬品配置図

尻は隅抉である。目釘孔は2カ所存在するが、関側の孔は肉眼でもあまり明確ではない。木質はほとんど残存しない。なお、刀身は関から6 cmのところまで破損により屈曲する。2は刀身部分の破片2点、鋒片1点があるが、接合しない。残存状況は最も悪く、最も残りのよい破片でもいずれが茎側となるか不明である。刀身は全体に内湾するが、錆によるものと推定できる。刃部幅は一番広いから、出土大刀の中で最大の個体であったと推定できる。3は茎部と鋒先端若干を欠くほか、刀身を部分的に欠損する。現状で柄側は幅を減している。しかし、刃部側がすべて破損面で本来の面が存在しないこと、X線写真でも目釘孔が確認できないことなどから、茎部は残存していないものと考えられる。柄側15 cm程度が内湾するが、本来の形態かどうかは不明である。

4は刀身に欠損部分があるものの、鋒から茎尻までほぼ完全に残存する。刀身は関から約10 cmの部分で若干内湾するが、錆化と破損によるものの可能性がある。関部は直角に大きく切れ込むが、茎へつながる部分はカーブを描く。茎部は刀身部の半分程度の幅で、茎尻は隅抉である。表面の半分程度が木質に覆われる。目釘孔は2カ所存在するが、関側の孔は木質に覆われ肉眼ではほとんど確認できない。5は鋒と茎部先端を欠損し、部分的に表面が剥離するが、刀身の残りはよい。鏝と鉤が錆着する。刀身はこれのみカマス鋒である。関部は錆によって不明な点もあるが、不均等両関と考えられる。茎部には目釘孔1カ所が確認できるほか、表面に柄の木質が一部残存する。刀身には木質等は確認できない。鏝は、ずれた状態で茎に錆着する。完形の無透鏝で、ややゆがんだ倒卵形を呈す。鉤は佩裏側のみ3分の1程度が残存する。鉄製筒状で、幅1.3 cm、厚さ0.2 cmをはかる。断面形は倒卵形である。

鉄鉞(図3-6)

1点が存在する。遺存状況はよくなく、鋒を欠き、身部や袋部も縦半分程度しか残っていない。身部の断面は現状では台形を呈し、復元すると六角形ともなる。しかし、錆によって膨張したものと考えられ、もともとは四角形の鑄式であったと考えられる。なお、この錆膨れたため、刃部と鑄の区別は明確ではない。袋部端部は直基式、袋部断面は円形である。内面には基部から4 cm程度まで木質が残存する。袋部に合わせ目の一部が残存するのが確認できる。関はあまり明確ではなく、若干くびれる程度である。復元全長は25 cm程度となる。

鏝(図3-7~9)

3点が確認できる。いずれも象嵌は認められない。1は倒卵形を呈す鉄製無透鏝である。錆化による破損が激しいが、全体の3分の2程度残存する。表面に鉄製の鉤が錆着する。鏝は大型で、厚さ0.7~0.9 cmをはかる。鉤は土圧によるものか、ややゆがむ。内側に木質が残るほか、刀身の一部とみられる鉄片が錆着する。2は倒卵形の鉄製有透鏝。破損するが、形態はよくわかる。透かしはひずんだ台形で、7カ所存在する。中央孔の周囲には鉤などの部品の痕跡が認められる。3は鉄製有透鏝。2片あり、同一個体と考えられるが接点がなく、残存もよくないためどのように1個体を構成するのか判然としない。全体に2よりも薄手で、透かしの幅が広く細長い。

円頭柄頭(図3-10)

鉄製の円頭柄頭で、一体で造られる。端部に金具が錆着する³⁾。柄頭は佩表側を破損しているほか、表面が剥離する部分がある。金具は佩裏側が破損する。象嵌は確認できない。柄頭の側面形はU字形で、端部でややすばまる。内面を見ると、横断面は杏仁形で稜をもつ。全体的に錆化が激しいが、外面にも稜が存在すると考えられる。目釘孔はX線写真でも確認できない。内面には木質が残る。

金具の平面形は柄頭の断面とは異なり、背側は丸くなる倒卵形を呈す。断面は長方形である。

鉄鏃

鉄鏃は19点を数える。破損が激しく、完形品は存在しない。

A 平根系鉄鏃(図4-1~3)

3点を数える。1は腸袂柳葉式。茎部を欠き、鏃身部の片側逆刺部先端と鏃身部の一部が破損している。鏃身部はフクラを有し、ややくびれた後逆刺部で開く。逆刺部先端は尖らず、途中で切断したような形状をとる。鏃身部断面は薄い凸レンズ状、頸部断面は長方形を呈す。茎関はほとんど残っていないが直角関である。2は長三角形式。茎部を途中から欠損する。鏃身部片側はフクラを有するが、もう一方はやや角張る。側面は直線的に開く。鏃身関はわずかに逆刺となるが、角に切り込みを入れ棘状に加工している。頸部は茎関へ向かってやや広がる。茎部は断面正方形で、表面に糸を巻いた矢柄の木質が残る。3は三角形式。鏃身部先端と茎部先端をともに欠く。鏃身部はフクラを有するが、側面は直線的に開く。鏃身関は直角関、茎関も直角関となる。鏃身部厚0.1 cmと薄い。

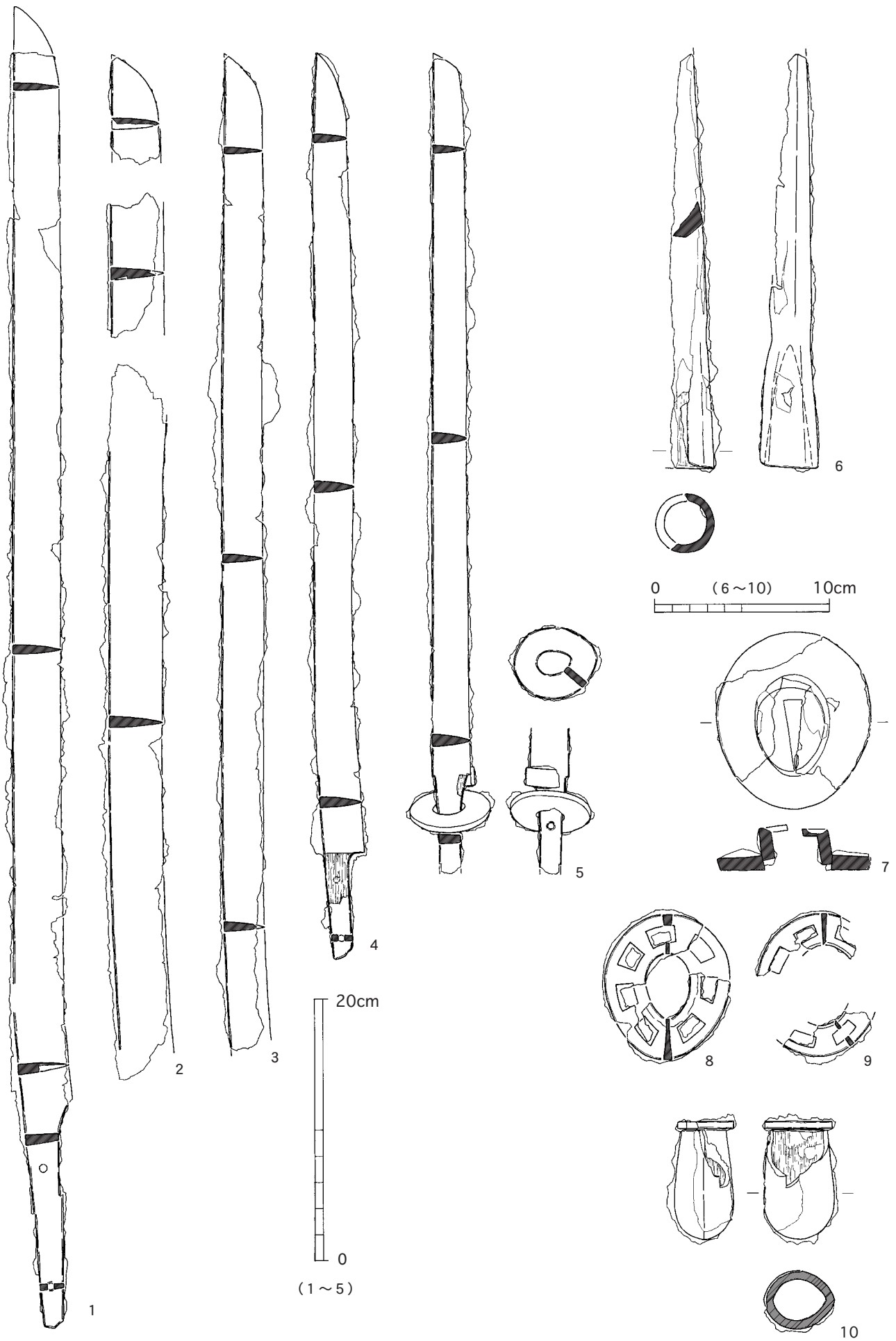


图3 遺物実測図① (太刀、鉄鉾、鏑、円頭柄頭)

B 尖根系鉄鏃(図4 - 4 ~ 19)

破片は16点を数えるが、鏃身部の形態がわかるものは7点である⁴⁾。短頸鏃と長頸鏃が存在する。

短頸鏃

4は柳葉式で、鏃身部と茎部の先端を欠くものの、ほぼ完形である。柳葉形の鏃身部に中央でやや細くなる頸部が続く。鏃身関は撫角関、茎関は直角関である。5は茎部のほとんどを欠く。長三角形式であるが、鏃身部は非常に長く、明確な鑄を有し断面は菱形となる。鏃身関は直角関で、短い頸部が続く。錆で不明なところがあるが、鑄は頸部途中まで存在するとみられる。

長頸鏃

柳葉式は4点が確認できる。鏃身部はフクラを有し先端寄りで最大幅となり、鏃身関に向かって直線的に細くなる形態をとる。鏃身関は直角関である。鏃身部の断面は両丸造りであるが、9のみ片丸造りである。頸部の断面は長方形。茎関まで残るものは6のみで、棘関である。その他、頸部~茎部にかけての破片には、角関、台形関、棘関があり、バラエティに富む。10は段違い関で、鏃身部は切刃造りである。また、11は鏃身部を欠くものの、独立片逆刺と考えられる部分がある。逆刺部先端は欠損する。

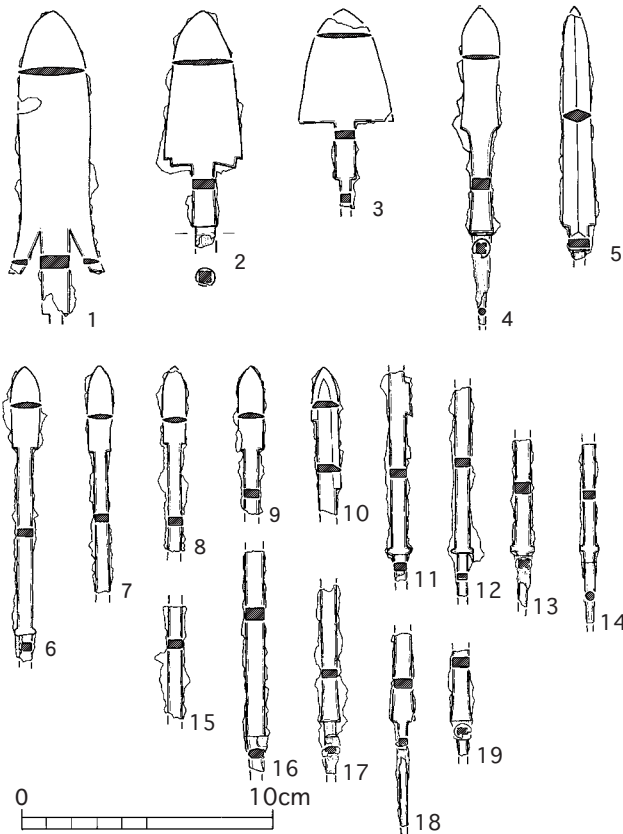


図4 遺物実測図②(鉄鏃)

2 馬具

鈴雲珠(図5 - 1)

頂部飾りに鈴をつけたものである。これまで「鈴雲珠」と呼ばれてきたが、鉢部の大きさなどから実際には辻金具と考えられる。便宜上、これまでの名称で記述する。

本体は鉄製で、金銅装などは見られない。脚は現状では2脚が残存するのみである。脚の平面形は尖頭形であるが、先端がやや広くなり圭頭形を呈す。中央に径2mm程の鉋孔が開けられるが、鉋自体は失われている。穿孔は表面から行われる。脚の基部には1本の貢金具が伴う。表面に刻みなどは確認できない。脚部裏面には皮革と思われる有機質の痕跡が残る。鉢部は腹部が垂直に立ち上がったあと、ドーム状に盛り上がる。腹部に凹線などの装飾はみられない。花形座は直径4cm、厚さ0.3cmほどの円形を呈す。

鈴は青銅製鑄造品で、横断面が八角形を呈する。土圧によってか、ややひずむ。鈴体中央には断面半円形の突帯2条が巡る。鈴口は断面台形の突帯が周囲につけられる。突帯の外形は、鈴口の両端で楕円形となる。一方はもう一方に比べ突出し、中央部分が桃実状に尖る。鈴口は、突出高の低い側で端部から0.5cmほどの所が挟られ、その上部に突出部が存在する。内部には鉄製の丸が入っている。錆と破損で元々の形状は明らかではないが、楕円球体であった可能性がある。鈕側中央の面に2箇所、直径3mmの孔があり、型持孔と考えられる。鈕は断面が楕円形、鈕孔はほぼ円形と考えられる。鉢部頂部の穴から鈕を差しこみ、長さ4.6cm、太さ3mm四方の細い鉄角棒を鈕孔に通して留めている状況が観察できる。

金銅金具(図5 - 2 ~ 5)

金銅金具は4点を数える。法量に若干の差はあるが、ほぼ同形で同じ造りである。平面形はややひずんだ長方形で、中央が半球形に盛り上がる。1点がほぼ完形で残るが、他の3点は小片となっていた。接合を試み残りの良いものを図化した。接合しない破片も多数ある。

2は一部欠損するが、ほぼ完形である。緑青が認められるが、表面の状態はおおむね良好である。銅板は厚さ0.5mmで、表面に鍍金がなされる。4隅には直径1mmの孔が開けられている。裏面に孔の縁が突出しており、表面から工具を打ち込んで穿孔したことがわかる。孔には鉋等の留め具の痕跡は認められない。表面には、製作の際についたと考えられる細かい条線が確認できる。球状部はやや右上がり、平面部は0.7

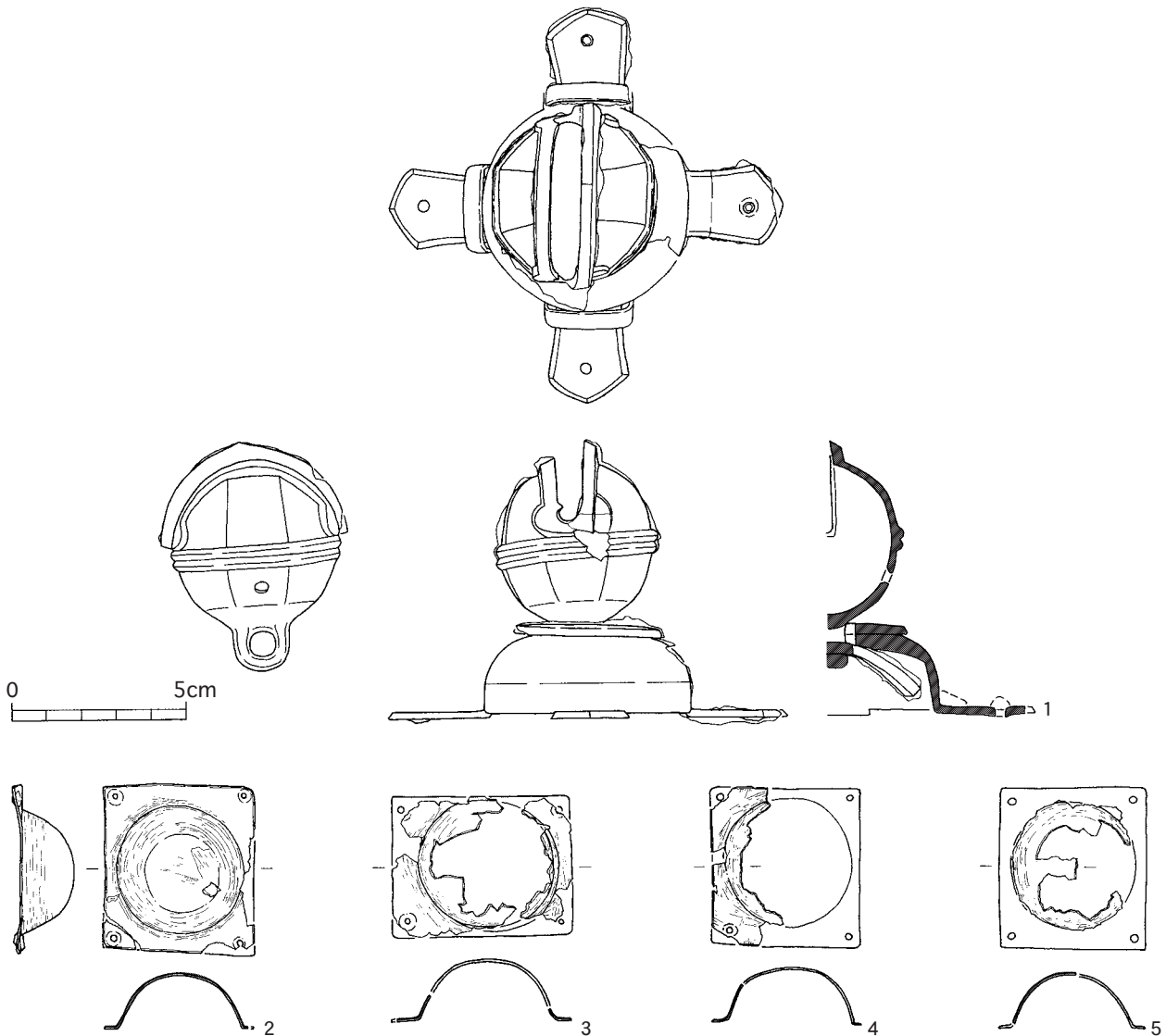


図5 遺物実測図③(馬具)

cmほどの長さで、ともに直線的に残る。3は縁部の残りが比較的よく、ほぼ大きさがわかるものの球状部の残りは悪い。また、縁辺の腐食も激しい。2よりも横長の形態をとる。球状部から縁部に移る部分で、2度屈曲する箇所が存在する。4は1辺と球状部若干が残存する。表面の鍍金が裏面までつながっているのが観察できる。5は周縁部がほとんど残存せず球状部のみである。

金銅製で、球状形の突出があるものとして、馬具の飾り金具がある。こうした例と鈴雲珠の存在を考慮して、馬具に伴う飾り金具としておく。

3 装身具

耳環(図6-1)

銀製の耳環であるが、表面は酸化によって黒褐色を呈する。環はややゆがみ、開き部がずれている。環体

は直径2mmほどの銀製針金で、断面は円形である。針金製作に伴うような痕跡は確認できない。

玉類(図6-2~20)

勾玉1点、切子玉1点、ガラス玉17点が確認できる。

勾玉(2)は瑪瑙製。完形である。腹側はなめらかなカーブを描くが背側はやや角張る。全体的によく研磨されるが、一部整形時の粗い研磨痕が残る。穿孔は片面穿孔で、終端側は押圧により剥離する。切子玉(3)は水晶製で完形。表面はよく研磨された面もあるが、整形時の粗い研磨痕を残す面が多い。両端面も傾斜しており、雑な造りの印象を受ける。穿孔は片面穿孔である。両端面は孔周辺が一部剥離する。

ガラス玉は法量と形態、製作技法から、便宜上丸玉と小玉に分けて記述する。

丸玉(4~7) 直径1.2cm程度の球形を呈する。巻

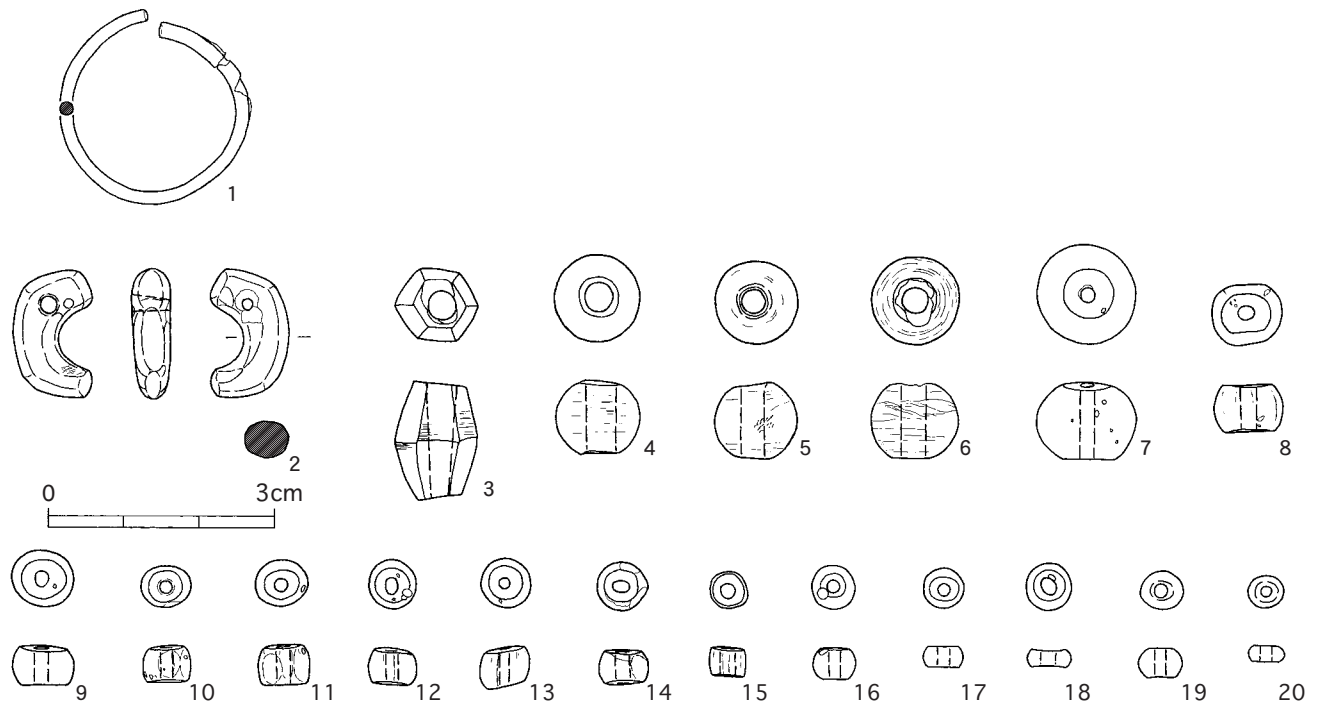


図6 遺物実測図④(装身具)

き付け法によって作られており、表面はなめらかであるが、ガラスを巻き付けた痕跡が認められるものも存在する。また、端面に平行な気泡が認められる。孔中には軸棒の痕跡が残る。色調は濃紺色。なお、7は端面が平坦で孔径が小さく、他の3点と若干異なる。

小玉 2タイプがある。小玉A(8～17)は直径0.5～0.9 cmで、平面形はややひずむ。孔に平行な気泡が見られることから、引き延ばし法で作られた管を切断して成形したものと考えられる。両端面は加熱して平坦にしているようである。色調は紫紺色～青色。小玉B(18～20)は直径0.4～0.6 cmで端面が丸い。平面形はほぼ円形である。気泡に規則性が見られないことから、切断法によるものではないと考えられる。色調は青緑色で、透明度が高い。

4 須恵器

当博物館所蔵の須恵器は、所蔵に至った経緯からも窺えるとおり、A石室内及び同羨道部からの出土がほとんどであるが、B石室出土品も2点存在する。

(1) A石室出土(図7-1～28, 図8-31～37)

杯蓋12点、杯身16点、高杯2点、甕2点、提瓶1点、平瓶1点、子持脚付壺1点が確認できる⁵⁾。

杯蓋は出雲地域の地域性と捉えられる、二条沈線によって肩部の段を表現するものが大半である。口径、口縁部内面の段および天井部上面の回転ヘラケズリの精粗等に差が見られる。1は口縁内側に明瞭な段をつ

くる。2～4も段が見られるものの、痕跡的である。また、11, 12は天井部の回転ヘラケズリがなされず、ヘラ切り痕が残る。杯身は立ち上がりやや短く、内傾するものがほとんどである。基本的に底部は回転ヘラケズリであるが、26～28は省略される。13は外面に自然釉が厚く付着しているため調整等が不明であるが、薄い造りで立ち上がりやや長い。23～25の3個体は底部の回転ヘラケズリの中心がずれて施されているという特徴がある。形態もよく似ており同工品の可能性がある。

高杯はともに長脚2段3方向透かしである。上段は切れ込みのみ、下段は台形の上辺がほとんど無くなり三角形となる。31は器壁が薄く、丁寧な造りであるのに対し、32は脚がやや短く、造りが粗雑である。甕は、口縁部上半に波状文、胴部中央に列点文が施される。基本的に平底で胴部下半は回転ヘラケズリが施されるが、33の底部中央には施されない。33は口縁端部がわずかに外反するが、34は内湾する。提瓶は直口縁でほぼ左右対称の胴部形態である。肩部には把手が付くが、上側接合面はしっかり接合して、下方に折り曲げる形態をとる。平瓶は肩が合った胴部に直口縁がつく。胴部は円盤閉塞の後、中心から1.5 cmのところ径5 cm程度の孔を穿孔し、別づくりの口縁部を接合する。肩部の2カ所には、小さな粘土粒が貼り付けられている。胴部下半から底部にかけて、幅広の回転ヘラケズリが施される。

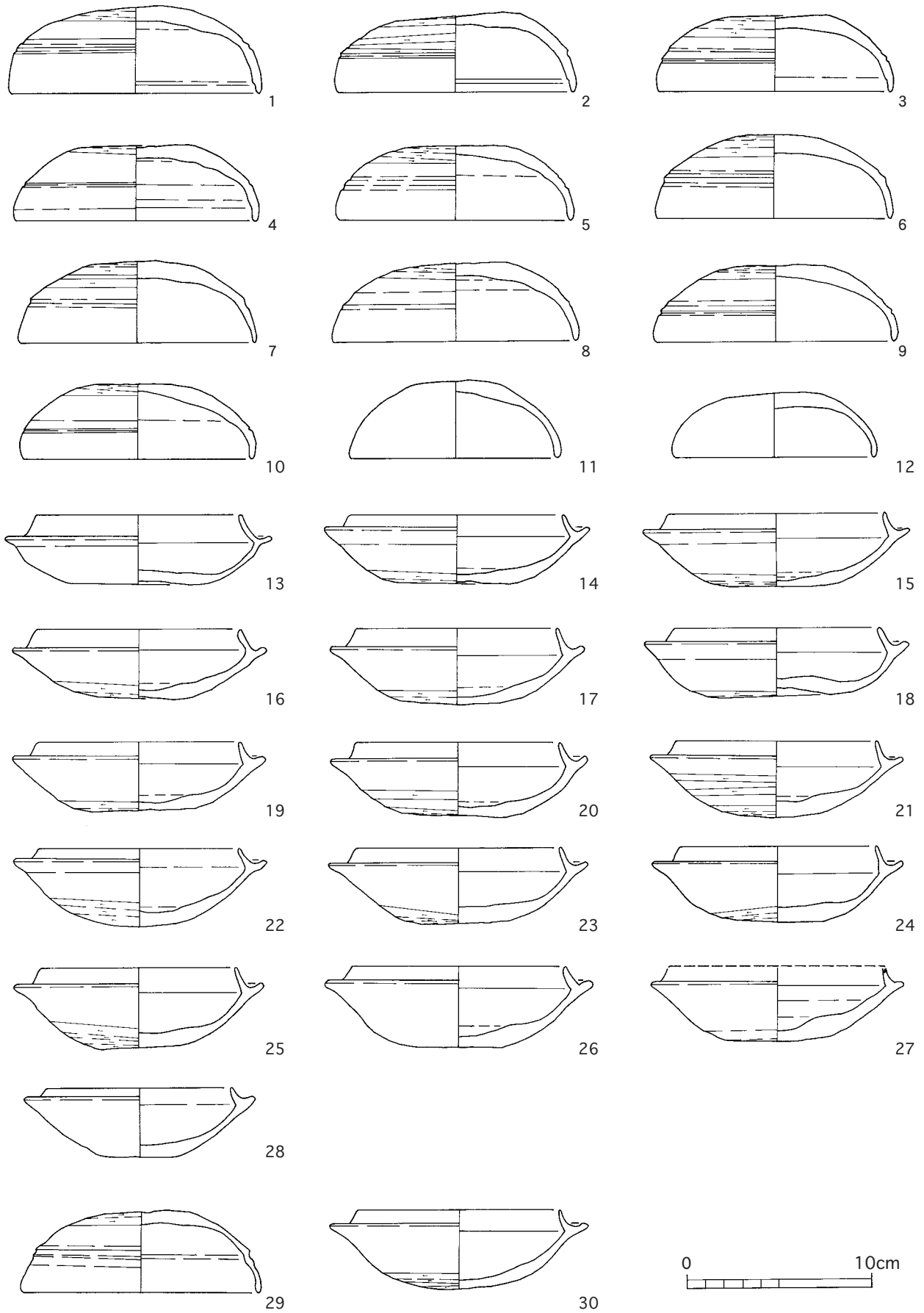


図7 遺物実測図⑤(須恵器)

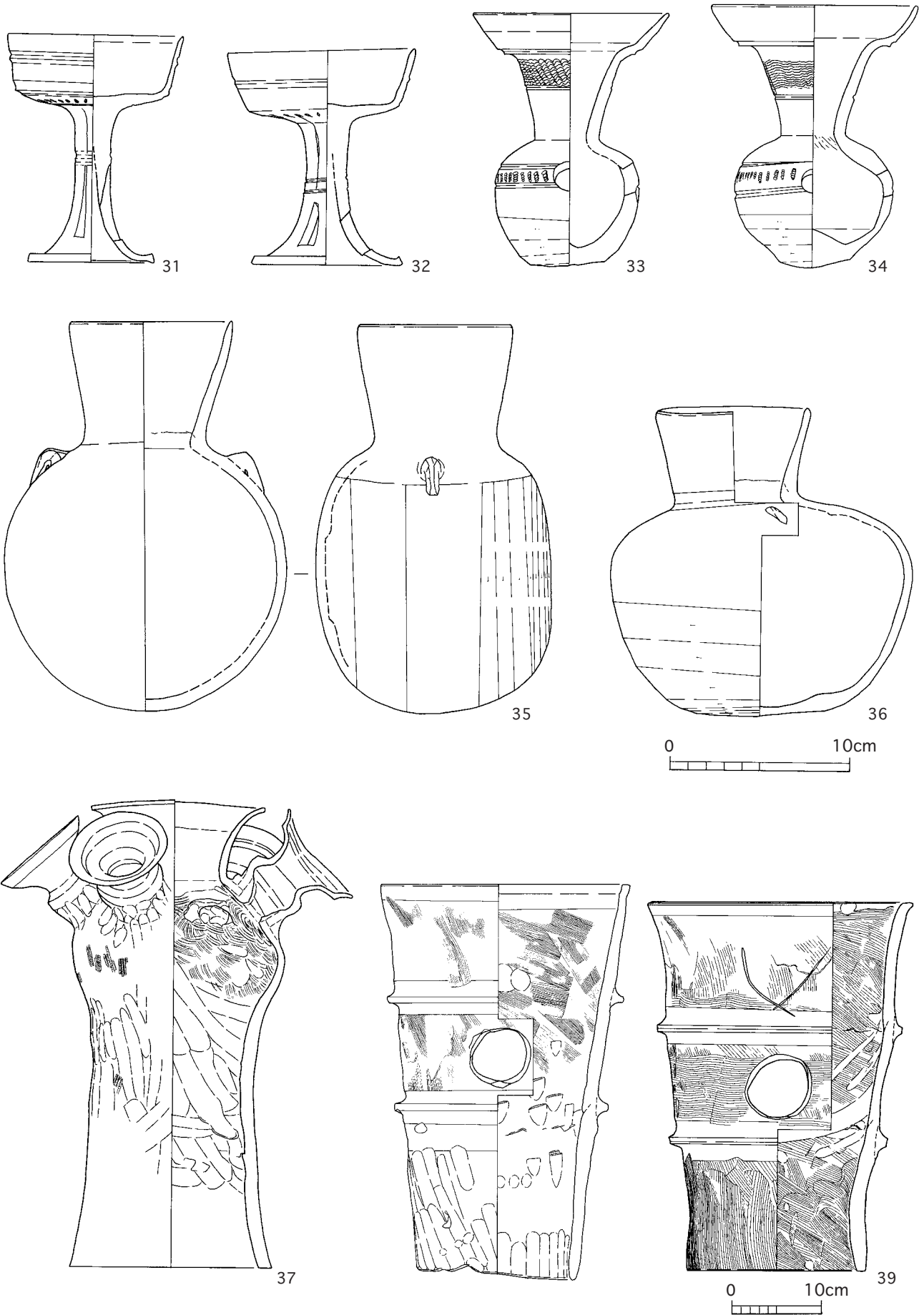


図8 遺物実測図⑥(須恵器、円筒埴輪)

子持脚付壺は、底の無い壺部に筒状の脚部がつく。脚部端部は破損する。肩部に6個の小壺がつくが、うち2個は欠損する。外面調整は脚部下半が平行タタキ、脚部～壺部にかけては縦方向にナデ上げる。壺部は平行タタキが施される。上下のタタキはナデによって消されるため、それぞれ別造りにした壺部と脚部を合わせ、接合部をナデたものと考えられる。内面調整は、壺部下半以下がナデで、壺部には同心円状の当て具痕が残る。子壺は口縁部形態が少しずつ異なる。大きく分けると口縁部外面の稜が1稜と2稜の2種類になる。子壺の接合に際しては、まず壺の肩部に穿孔したのち、底のない子壺をのせ、内外面に粘土を足している状況を確認できる。外面は指でナデつける。壺部内面に足した粘土がはみ出す部分が存在する。

(2) B 石室出土(図7 - 29, 30)

蓋杯の身と蓋各1点がある。杯蓋はA石室出土品同様、2条の凹線で肩部の段を表現する。やや薄い造りである。杯身の内外面に赤色顔料がわずかに付着する。

5 円筒埴輪(図8 - 38, 39)

2点あり、いずれもA石室羨道部からの出土である。38は若干の欠損部分はあるものの、ほぼ完形品である。外面の風化が激しく、調整等が観察できない場所も多い。外面は一次調整がタテ(ナナメ)ハケで、口縁部にのみ二次調整のタテハケが確認できる。内面調整は土が付着して観察できない部分も多いが、上半はナナメハケである。2段目に円形の透かしが対向して穿孔される。底部は外面に幅2cm程度の直線的な窪みが連続しているのが観察できる。断面は緩やかなカーブを描く。棒状工具による押圧、もしくはタタキによるものと考えられ、二段に施されている状況が看取できる。内面は付着した土により観察できない部分もあるが、指頭圧痕が認められる部分がある。底部近くは規則的に指跡が並んでおり、外面調整の際の押さえと考えられる。なお、中間付近までは工具圧痕も認められるが、これも底部調整の際についたものと考えられる。外面の1条目突帯下には底部調整後に幅3cm程度のヨコナデが施されるが、これは底部調整の工具痕端部を消している可能性がある。口縁部は直口縁で、ヨコナデで調整する。焼成は軟質であり良好とはいえない。黒斑は認められない。

39は以前に実測図が公表されている(寺西1985)が、再接合を行ったこともあり新たに実測をやり直した。外面は一次調整がナナメハケ、二次調整として2段目にB種ヨコハケを施す。2条目突帯の直上のヨコハケは、突帯貼付のナデに消されることから、突帯貼り付

け前にヨコハケ調整が行われたことがわかる。2段目のヨコハケ上には手の跡⁶⁾が観察でき、その部分で器壁が若干くぼむ。手の跡は透かしと直交する場所に位置する。口縁部ではタテハケの上にナナメハケが認められ、始点は粘土が段になる。内面調整はナナメハケで、1条目突帯付近のみハケの上からナデで調整される。底部は倒立して外面タテハケ、内面ナナメハケを施す。外面のタテハケは下から見て時計回り、内面は反時計回りに施される。ハケ調整の後、底部を切断しており、底面には砂粒が動いた痕跡が残る。口縁部はナデが施され、若干外反する。内面はナデ上にナナメハケが認められる。透かしは円形で2段目に対向して穿孔される。両方とも直上に「V」に似たヘラ記号が刻まれる。透かしを入れる場所の目印の可能性もある。焼成は良好で、橙色を呈す。黒斑は認められない。

考察

1 遺物について

宗像1号墳からは、以上報告したとおり様々な遺物が出土している。こうした遺物の特徴及び年代等について、若干の考察を加えてみたい。

大刀

5点の大刀のうち、全体の形状がほぼわかるのは3点である。このうち、5は不均等両関であり、TK43～209期に見られる(臼杵1984)。また、4は直角片関隅抉尻細茎に分類できるが、同様にTK43～TK209期に見られる。1もまた細茎であり、同時期にあたるものと考えられる。

円頭柄頭はいずれの大刀と組み合うのかは現状では確定できないが、全体的なバランスからすると1や2などの大型品ではなく、4や5などと組み合う可能性が高い。目釘孔が認められないことから、「木心はめ込み式」もしくは「茎はめ込み式」(滝瀬1984)であると考えられるが、形態や内面の状況、出土大刀の茎幅などから考えると前者の可能性が高いといえよう。円頭大刀の分類(滝瀬1984)では類例が挙げられていないが、茎はめ込み式の年代から考えてTK43期以降と考えられる。

鉄鉾

鉄鉾は刃部が鑄式、袋端部が直基の形態をとる。関部はわずかにくびれる程度で、はっきりしない。高田貫太氏の編年で、関の退化が進んだ期にあたる考

えられる(高田 1998)。鑄式鉄鋌の副葬は6世紀末で終了するとされるため、副葬年代の下限が押さえられる。

期は、三角穂式鉄鋌が登場し盛行する時期で、地方でこの型式が出土する古墳は有力古墳である。宗像1号墳はそうした三角穂式ではなく鑄式であるが、周辺に鋌を副葬する古墳はないことは注目される。

鉄鋌

鉄鋌は当館所蔵分として19点、鋌身部では10点である。米子市立山陰歴史館所蔵資料中に少なくとも13点の鋌身部が存在するため、総数としてはさらに多い鉄鋌が副葬されていたと考えられる。

鋌身部の形態がわかる10点のうち、平根系は3点で、いずれも鋌身部の形態が異なる。2は関部に切れ込みを入れる特殊なもので、類例は少ない。尖根系もまたバラエティに富み、短頸の柳葉式や、鋌身が長く鑄を持つものといった、類例の少ないものが含まれる。長頸鋌は柳葉式が主体となるが、段違い関や独立片逆刺のものなど、県内の同時期の古墳では見られないものも確認できる。

鉄鋌の組み合わせは、長頸鋌が主体で少数の平根系が伴う、後期古墳で通有のものである(尾上 1993)が、長頸鋌に腸袂柳葉式が見られないという特徴がある。同様の組み合わせが見られる地域として島根県地域が挙げられるが、同地域では片刃鋌が伴う。宗像1号墳では片刃鋌は今のところ確認できないが、組み合わせは島根県地域に近い様相を示すことは注目される。

長頸鋌のうち、段違い関長頸鋌は古墳時代後期における、各地域を代表する有力古墳から出土することが多いことが指摘されている(鈴木 2003)。畿内との関わりが強い遺物と考えられることから、宗像1号墳の被葬者像の一端が窺える。

鈴雲珠(辻金具)

雲珠もしくは辻金具の頂部飾りとして鈴をつける例は、多くはないが神奈川縣登尾山古墳など何例が存在する。鈴をつける雲珠・辻金具の時期は、TK209期前後である(中條 2003)。ただし、こうした類例のほとんどは、鈴が横断面円形の金銅製で、大きさも本体に比べてそれほど大きくない。本例は鈴が大型かつ八角形であるという点で、他例と異なる。なお、本例のような鑄造八角形鈴は6世紀中頃に現れるとされる。(白木原 2003)。また、辻金具本体について見てみると、脚が尖頭形1鋌で、賁金具を用いるもので、多脚系の中の半円形脚系に分類できる(宮代 1986)。そうした点から、第1期(TK43後半～TK209期前半)に位置づけら

れる。

確実に馬具とできるのはこの1点のみで、金銅金具を合わせても2種類のみである。通常出土するはずの轡や鐙などが見られず、他所の所蔵資料中にも存在しない。乱掘を受けているとはいえ破片すらも存在しないのは、馬具がセットで副葬されたこと自体に疑問を抱かせるもので、宝器的な扱いを受けた可能性が考えられる。

金銅金具

製作技法として、型に銅板を当てて打ち出す方法と型を使わず打ち出す方法が考えられる。表面の状態から、型を使用する方法の可能性が高い。これには、凹部(外型)に銅板を当てる、凸部(内型)に銅板を当てる、という2種の方法が考えられる。しかし、いずれをとったのかは痕跡からは確認できない。なお、全個体で球状部や平面部に認められる線は、形態を整えて表面を平滑する際の工具痕であろう。

長方形で突出部を2つ付ける金銅製飾り金具の存在と、鈴雲珠の存在を考慮して、馬具に伴う飾り金具としている。しかしながら、出土位置についてみると、鈴雲珠が前室出土であるのに対し、金具は後室で見ついている。また、出土状況も、右奥に片付けられたと考えられる大刀や玉類などと近い場所で出土している。こうしたことを考えると、大刀装具や帯金具など、別の用途も考えられる。

須恵器

宗像1号墳からは多くの須恵器が出土している。このうち、A石室出土資料で出土位置がほぼ確定できるものは、玄室内出土の杯身4点、杯蓋4点、提瓶1点にすぎない。羨道部出土資料は、残念ながら出土状況が全く不明である。

玄室内のうち、後室からは杯身2点、杯蓋1点が、前室からは杯身2点、杯蓋3点、提瓶1点が出土している。注記等から、後室左奥隅で見つかった1と14、前室の12と28がセットだったと考えられる。杯蓋4点について見ると、型式差が認められる。1は口縁端部内面に明瞭な段をもち、天井部の中央にヘラ切り痕が残るものの回転ヘラケズリは比較的丁寧である。5は口縁端部の段が認められない。11、12はともに天井部の回転ヘラケズリが省略され、ヘラ切り痕が未調整でのこる。径も11cm以下と小型である。これを大谷晃二氏の分類(大谷 1994)に照らし合わせると、1はA3a型に、5がA4型に、11、12はA7型にあたる。また、提瓶は口縁と把手の形状からC2型に分類できる。

同氏の編年では1が出雲3期に5と提瓶が出雲4期に、11, 12が出雲5期に位置づけられる。陶邑編年で、3期はTK43期、4期がTK209期、5期がTK217期に併行する。

須恵器の時期差が埋葬時期を表すとすると、出雲3期から5期まで、3回程度の埋葬が行われたことを想定できる。出土位置を勘案すると、出雲3期に玄室後室に埋葬が行われ、前室に出雲4期と5期に追葬が行われたことになる。あるいは、杯蓋A3a型も一部4期まで降る可能性が指摘されており、初葬を4期の初頭とすることも可能である。

羨道出土の資料について見てみる。杯蓋は、口縁端面内面に段をもつものは存在するが、天井部の回転ヘラケズリが粗雑なものが多い。A3a型の中でも新しいものと考えられる。杯蓋の多くはA4型である。また、杯身は2個体が底部回転ヘラケズリを省略する。無蓋高杯はA4型に、甕はA5型に分類できる。平瓶は口縁部と把手の形状からC1型に分類できるが、把手はかなり退化する。羨道部での遺物出土状況が全くわからないが、羨道部の資料も3段階程度に分けることが可能で、玄室の埋葬に対応するものと想定できる。

子持脚付壺は、柳浦俊一氏の集成によれば有脚類に分類できる(柳浦1993)。子壺の接合方法はa手法であり、古相とできる。しかし、本体の壺部が相対的にやや小さく、新しい様相ももつといえる。この有脚類の子持脚付壺は松江市周辺に分布が集中しており、西伯耆では3古墳からの出土が確認できるのみである。

B石室出土蓋杯は4期に位置づけられる。B石室出土須恵器の全てを検討できたわけではないが、A石室とほぼ同時期か、若干遅れる時期の築造と考えられる。

埴輪

38は外面が一次タテ八ケ調整のみ、内面は上半八ケ調整である。底部調整は棒状工具による押圧、もしくはタタキである。こうした埴輪は川西宏幸氏の編年による3期に位置づけられる(川西1978)。この埴輪は、米子平野南部の米子市別所1号墳(米子市教委1983)の第1石室羨道で見つかったものと分量・形態・調整等において類似する。別所1号墳はTK43～TK209期に位置づけられる。

これに対し、39は特徴的である。2段目に二次調整としてB種ヨコ八ケを施すほか、底部調整として内外面とも倒立して八ケ調整を行い、端部をカットしている。こうした底部倒立八ケ調整後、端部を切断する技法は、出雲においては1段階(TK23～MT15期)に見られるもので、下っても2段階初頭(MT15～TK10期)

までである(大谷2003)。周辺で同時期の埴輪が多数出土した陰田古墳群(中原1984)でも、同様の技法は見られない。B種ヨコ八ケも、陰田古墳群において6世紀前葉までで見られなくなる。底部カット技法については地域差があることから、この地域が6世紀中葉以降まで同技法が残存する地域であった可能性があるが、これまで類例がない。B種ヨコ八ケの存在からすると、あるいは、1～2段階の埴輪をもつ古墳から持ち込まれた可能性も考えられる。

両円筒埴輪は製作技法、焼成、胎土等が全く異なることから、同一工人の手になるとは考えられない。時期差とするのが最も素直な解釈であるが、周辺の埴輪の検討も含め今後の課題としたい。

これら埴輪は、A石室の羨道から3個体が破砕された状態で見つかったとされる。石室閉塞後に羨道部でこれらを破砕して、何らかの祭祀が行われた可能性がある。しかしながら、出土状況写真・図や土層図等の記録がなく、須恵器類との関係、閉塞との関係などが不明で、現状ではこれ以上の考察は不可能である。なお、前述の米子市別所1号墳では、羨道部で「角礫と円筒埴輪による閉塞施設」が確認されており、同様の状況であった可能性がある。また、島根県御崎山古墳(島根県教委ほか1996)でも羨道部から埴輪が見つまっているが、墳丘からの転落とされている。こうした羨道部から出土する円筒埴輪の性格は、今後の検討課題である。

2 宗像1号墳の位置づけ

築造年代

遺物ごとに年代観を述べてきたが、まとめると表3のようになる。

宗像1号墳出土遺物のうち、A石室出土遺物の年代はTK43～TK217期におさまる。A石室の築造時期は、TK43期後半になると考えられる。そして、須恵器杯蓋の検討から、出雲5期(TK217期)まで2回程度追葬が行われたと考えられる。これまで、宗像1号墳の築造時期はTK43期とされていたが、築造時期がほぼ確定できたといえる。また、出土状況を見る限り、後室・前室ともに大刀や装身具が片寄って存在しており、乱掘等に伴うものでなければ追葬に伴う片付けを想像させる(図2)。したがって、後室・前室ともに1回以上追葬が行われる、すなわち、3回以上の追葬が行われた可能性も想定できる。しかしながら、出土状況図と現在ある遺物の対照が須恵器以外できないこと、羨道部の状況がわからないことから、これ以上の考察は不可能である。

古墳時代後期後葉における米子平野の様相

まず、宗像1号墳が築造された古墳時代後期後葉について、同時期に位置づけられる前方後円墳および大型円墳について検討する。

旧汗入郡となる淀江町の向山古墳群では、古墳時代中期後葉から継続的に全長50mを超える前方後円墳が築造されており、西伯耆において大きな勢力を持っていたことが窺える。後期後葉(TK43期)にいたって、複室構造の石棺式石室をもつ岩屋古墳が築かれる。向山古墳群においては、これ以降顕著な前方後円墳が築かれぬ。旧会見郡では、米子平野南部の長者原台地において、TK43～TK209期の段階に二子塚古墳や別所1号墳が築かれる。日野川右岸においては、石州府1号墳、岸本7号墳のように、宗像1号墳の墳丘規模を上回る大型円墳が築かれる。長者原台地、日野川右岸の古墳については、前段階に位置づけられる首長墳が認められないという類似点が存在する。すなわち、向山古墳群で前方後円墳の築造が終わると同時期に、前段階に首長墳が見られなかった米子平野中南部で前方後円墳、大型円墳が築かれるという現象が認められる。こうした状況から、米子平野周辺では、向山古墳群を築いた勢力が弱まり、各地の有力集団が古墳を築いたことが想定できる。また、この中にも、宗像1号墳や別所1号墳のように前方後円墳を築く日野川左岸～法勝寺川下流域と、石州府1号墳や岸本7号墳のように大型円墳を築く日野川右岸地域とがあった。これらの古墳は、石室形態に大きな違いはなく、それぞれ関係を持ちつつ独自に首長墳を築いたことが考えられる。

宗像1号墳を含む法勝寺川下流の丘陵地帯には、高山古墳や東宗像2号墳などが継続的に築かれている。

表3. 宗像1号墳出土遺物の時期

遺物 (陶器)	年代		
	TK43	TK209	TK217
大刀	■	■	■
円頭柄頭	■	■	■
鉄鉾	■	■	■
鈴雲珠		■	■
(鈴)	■	■	■
須恵器	■	■	■
(子持壺)	■		
埴輪	■	■	■

この地域一帯を範囲とする勢力が、代々この丘陵上に首長墳が築いていたと考えられる。ところで、宗像1号墳は墳丘規模がそれほど大きくなく、全長では石州府1号墳や岸本7号墳を下回る。前方後円形という形はそれまで首長墳に採用されていたものであり、そうした伝統の中で前方後円形を採用していたと考えられる。

宗像1号墳は宗像古墳群で最大の規模を持っている。宗像1号墳に最初に埋葬された人物は、法勝寺川下流域を支配していた勢力の中でも大きな力を持った首長と考えられる。

おわりに

本稿では、当館が所蔵する宗像1号墳出土資料の全てについて、検討し考察を加えた。宗像1号墳A石室の築造時期はTK43期で、TK217期まで長期間にわたって追葬が行われたことが明らかになった。西伯耆の古墳時代後期を考える上で、本古墳は重要な古墳の一つであり、被葬者の性格についても一端が明らかとなった。本稿で紹介した資料は、当博物館に長い間常設展示されており衆目に触れる機会は多かったものの、これまで個別に一部が考察されることがあった程度である。本稿によって、本古墳に関する基礎資料とすることができた。今後、鳥取県の古墳時代研究に寄与することができれば幸いである。

なお、今回紹介した以外に、前述の通り米子市立山陰歴史館にA石室出土品が保管されている。また、A石室以外にB石室やくびれ部、墳頂などからも遺物が出土している。これらもまた未報告で、その内容がよくわかっていない。今後はこれらの資料についても検討し、同古墳についての研究を深めたい。

本稿を執筆するにあたり、米子市教育委員会下高瑞哉氏から米子市立山陰歴史館所蔵資料の実見及び資料探索において多大な便宜を図っていただいた。また、馬具については中條英樹氏から御教示をいただいた。その他、下記の方々から、資料および文献探索等について様々な御教示・御援助をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

青木あかね、岩本崇、魚津知克、岸本浩忠、阪口英毅、下江健太

註

- 1) 墳丘の規模については、測量図から明確な傾斜変換点を読みとることができないため、これまでに公表されている数値を採った。全長に比べ墳丘高が高いため、規模については再検討の余地はある。
- 2) 宗像 1 号墳出土品に関する文献は、『鳥取県史』1(鳥取県 1972)がほぼ唯一のものといって過言ではない。しかしながら、同書中の記述と掲載されている平面図(図 2)において、出土品の数量や位置に齟齬が認められる。
- 3) 金具はこれまで耳環とされていたが、整理の結果柄頭に銹着した破片と接合し、柄頭に伴うことが判明した。
- 4) 米子市立山陰歴史館所蔵資料中の鉄鏃は柳葉式が大半を占めるが、三角形も認められる。
- 5) なお、『鳥取県史』の図からは、この他に甕、壺各 1 点が見て取れるが、現在確認できる資料中には存在しない。
- 6) 実際に手を重ねて観察した結果、倒立を正立に戻す際埴輪を持ち上げた手の跡と想定できた。しかし、観察した限り、倒立させる際の手の跡は確認できない。したがって、二次調整前に倒立し、二次調整後に正立に戻した可能性が指摘できる。また、ヨコハケの施す方向も、2 段目は左から右(上から見て反時計回り)であるのに対し、3 段目は右から左(上から見て時計回り)であるという違いがある。使用しているハケ原体が同一とみられることから、製作者の交代などは考えにくい。2 段目のヨコハケは倒立状態で、3 段目は正立状態で施された可能性がある。内外面調整から底部調整に至る過程は以下のように復元できる。まず、1 条目突帯を貼り付けた後、倒立させて 2 段目のヨコハケを施すとともに底部調整を行う。その後、2 段目を両手で保持して正立させ、3 段目にかかる部分にヨコハケを施し、2 条目突帯を貼り付ける。詳細な工程はまだ検討すべき点が多いが、円筒埴輪の製作技法の観察において注意を要する。

<参考文献>

- 白杵 勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集
- 2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書 16
- 尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性 - 長頸式鉄鏃出現以後の西日本を中心として - 」『考古学研究』第 40 巻第 1 号
- 小野山節 1990『日本馬具大観』第一巻古代上
- 角田徳幸 1985「法勝寺川流域および日野川下流域における横穴式石室とその系譜」『島根県考古学会誌』第 2 集
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64 巻 2 号
- 島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要
- 白木原宜 2002「鑄造馬具の地域性 - 特に馬鈴について - 」『考古学ジャーナル』No.496
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『榎原考古学研究所論集』第 8 集 創立 50 周年記念
- 鈴木一有 2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第 10 号(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 高田貫太 1998「古墳副葬鉄鏃の性格」『考古学研究』第 45 巻第 1 号
- 滝瀬芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』
- 中條英樹 2003「神奈川県伝比々田村在古墳資料について」『會津八一記念博物館研究紀要』第 4 号
- 寺西健一 1985「円筒埴輪の地域性 - 館蔵円筒埴輪を中心に - 」『鳥取県立博物館研究報告』第 22 号
- 鳥取県編 1972『鳥取県史』第 1 巻 原始古代
- 中原 斉 1984「埴輪について」『陰田 一般国道九号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会
- 萩本 勝・佐古和枝 1984「須恵器について」『陰田 一般国道九号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会
- 濱 隆造 2004「鳥取県における中・後期古墳の階層秩序 - 西伯耆を中心として - 」『中・後期古墳の階層

秩序』第9回 中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集

松本岩雄編 1999『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4

宮代栄一 1986『古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年』日本古代文化研究』第3号

柳浦俊一 1993『島根・鳥取県出土子持壺集成』島根考古学会誌』第10集 10周年記念特集号

山内英樹 2003『墳輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～』『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16

米子市教育委員会 1983『米子市諏訪遺跡群発掘調査報告書』

米子市史編さん協議会編

1999『新修米子市史』第七巻 資料編 原始・古代・中世

2003『新修米子市史』第一巻 通史編 原始・古代・中世

< 挿図出典 >

図1は(米子市史編さん協議会編1999)および(角田1985)を一部改変。図2は(鳥取県編1972)から転載。図3～図8は筆者実測。

遺物計測・観察表

単位はcm、 は残存値、 は復元値

鉄刀

挿図番号	資料名	全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚	目釘孔径	残存状況	備考	登録番号	
図3-1	鉄刀3	97.3	79.8	3.85	0.8	17.5	2.5～1.5	0.8～0.5	0.6	鋒欠		725	013
図3-2	鉄刀4	54.2	54.2	4.0	0.9	-	-	0.9		刃部のみ		725	014
	鉄刀4 鋒	8.2	8.2	3.7	0.9	-	-	0.9		鋒のみ	上と接点なし	725	014
	鉄刀4 破片	11.0	11.0	3.7	0.9	-	-	0.9		刃部のみ	上と接点なし	725	014
図3-3	鉄刀5	75.5	75.5	3.2	0.75	-	-	0.75		刃部のみ		725	015
図3-4	鉄刀2	68.8	60.7	3.15	0.9	8.1	1.8	0.9～0.4		所々剥離	茎に木質	725	012
図3-5	鉄刀1	61.9	54.3	2.9	0.9	7.6	1.6	0.7	0.5	鋒、茎先欠	鏽着	725	009

円頭柄頭

挿図番号	資料名	全長	最大幅	最小幅	口径	器厚	備考	登録番号	
図3-10	円頭柄頭	6.2	4.0	3.4	3.4×2.5	0.5	金具が鏽着	725	009

鉄鉾

挿図番号	資料名	全長	刃部長	袋部長	袋部径	残存状況	登録番号	
図3-6	鉄鉾	23.5	15.0	7.5	3.3	縦半分	729	011

鏝

挿図番号	資料名	最大長	最大幅	厚さ	透かし	形態	備考	登録番号	
図3-7	鉄製鏝1	10.1	8.8	0.7～0.8	無	倒卵形	鉏が鏽着	729	008
図3-8	鉄製鏝2	8.3	7.1	0.2～0.5	7個	倒卵形		729	009
図3-9	鉄製鏝3	-	-	0.2～0.3	有り	円形?		729	010
(図3-5)	(鏝)	6.1	5.6	0.5	無	倒卵形	鉄刀1に鏽着	725	009

鉄鍬

挿図番号	資料名	型式	全長	鍬身部長	鍬身部最大幅	鍬身部厚	頸部長	頸部最大幅	頸部厚	茎部長	茎部最大幅	茎部厚	特徴	備考	登録番号
図4-1	鉄鍬1	腸袂柳葉	12.0	10.3	3.7	0.3	3.4	1.1	0.5					頸部途中から破損	721 010
図4-2	鉄鍬3	長三角形	8.3	6.2	3.1	0.2	2.5	1.0	0.4	0.8	0.45	0.45		茎部先端欠	721 012
図4-3	鉄鍬2	三角形	7.5	4.1	3.6	0.2	2.2	0.75	0.3	1.1	0.4	0.3		鍬身部・茎部先端欠	721 011
図4-4	鉄鍬11	柳葉	12.5	4.8	1.5	0.2	4.1	0.95	0.4	3.6	0.4	0.4		鍬身部・茎部先端欠	721 020
図4-5	鉄鍬14-1	長三角形	9.7	8.3	1.3	0.45	1.0	0.8	0.3	0.4	0.4		鑄造	鍬身部・頸部	721 023
図4-6	鉄鍬9	柳葉	11.6	3.2	1.2	0.2	7.3	0.85	0.3	1.1	0.5	0.3		鍬身部・茎部先端欠	721 018
図4-7	鉄鍬12	柳葉	8.9	3.4	1.0	0.2	5.5	0.55	0.3					鍬身部・頸部	721 021
図4-8	鉄鍬18	柳葉	7.1	2.9	1.0	0.2	4.2	0.5	0.3					鍬身部・頸部	721 027
図4-9	鉄鍬7	柳葉	5.8	3.3	1.0	0.15	2.0	0.45	0.3				片丸造	鍬身部・頸部	721 016
図4-10	鉄鍬10	段違い開	5.8	4.9	1.1	0.3	1.0	0.7	0.3					鍬身部・頸部	721 019
図4-11	鉄鍬8		8.2				7.2	0.95	0.3	1.0	0.5	0.3	独立片逆刺	頸部・茎部のみ	721 017
図4-12	鉄鍬17		8.3				6.6	0.6	0.35	1.7	0.35	0.2		頸部・茎部のみ	721 026
図4-13	鉄鍬14-2		6.6				4.3	0.6	0.4	2.1	0.4	0.3		頸部・茎部のみ	721 023
図4-14	鉄鍬15		7.1				4.2	0.8	0.3	2.9	0.35	0.35		頸部・茎部のみ	721 024
図4-15	鉄鍬6		4.5				4.5	0.55	0.3					頸部のみ	721 015
図4-16	鉄鍬13		8.7				7.3	0.75	0.45	1.4	0.6	0.35		頸部・茎部のみ	721 022
図4-17	鉄鍬5		7.5				5.4	0.8	0.3	2.1	0.4	0.3		頸部・茎部のみ	721 014
図4-18	鉄鍬16		7.6				3.5	0.9	0.35	4.1	0.25	0.3		頸部・茎部のみ	721 025
図4-19	鉄鍬4		4.2				2.8	0.95	0.35	1.4	0.4	0.25		頸部・茎部のみ	721 013

馬具

挿図番号	資料名	最大幅(径)	全高						出土位置	登録番号
図5-1	鈴雲珠	11.4	8.0						前室	749 006
	(辻金具)	最大径	全高	器厚	花形座径					
		5.9	2.8	0.2	4.2					
	(鈴)	最大径	鈴体高	最大幅	鈴口幅	鈴口高	紐幅	紐厚	紐孔径	
		4.7	6.5	5.3	0.9	2.7	1.6	0.8	0.7	

金銅金具

挿図番号	資料名	縦	横	半球部径	全高	器厚	備考	出土位置	登録番号
図5-2	金銅金具1	4.3	4.9	3.6		0.5	ほぼ完形	後室	749 002
図5-3	金銅金具4	4.0	5.1	3.5 x 3.8	0.9	0.5	半球部側面に穿孔	後室	749 005
図5-4	金銅金具2		4.5	3.6	1.2	0.5	1辺のみ	後室	749 003
図5-5	金銅金具3			3.7 x 3.5	1.55	0.5	半球部のみ	後室	749 004

装身具

挿図番号	資料名	縦	横	環体径	開き部幅	備考	出土位置	登録番号
図6-1	耳環	2.55	2.1	0.2	0.2	銀製	後室	711 032

玉類

挿図番号	資料名	最大長	幅・最大径	厚さ・最小径	孔径(a)	孔径(b)	色調	材質	特徴	登録番号
図6-2	勾玉	1.67	1.04	0.48	0.2	0.12	褐色	瑪瑙		462 019
図6-3	切子玉	1.58	1.09	0.98	0.39	0.19	無色	水晶		469 009
図6-4	丸玉	0.98	1.13	1.13	0.39	0.39	濃紺	ガラス		469 010
図6-5	丸玉	1.0	1.1	1.09	0.38	0.32	濃紺	ガラス		469 010
図6-6	丸玉	1.0	1.17	1.15	0.39	0.38	濃紺	ガラス	巻き付け痕残る	469 010
図6-7	丸玉	1.0	1.31	1.31	0.24	0.19	濃紺	ガラス		469 010
図6-8	小玉A	0.62	0.91	0.8	0.23	0.23	紺	ガラス		469 010
図6-9	小玉A	0.5	0.83	0.75	0.2	0.2	紺	ガラス		469 010
図6-10	小玉A	0.46	0.63	0.53	0.2	0.19	青	ガラス		469 010
図6-11	小玉A	0.53	0.67	0.6	0.2	0.2	紫紺	ガラス		469 010
図6-12	小玉A	0.48	0.63	0.62	0.22	0.22	紺	ガラス		469 010
図6-13	小玉A	0.56	0.65	0.65	0.14	0.14	紺	ガラス		469 010
図6-14	小玉A	0.45	0.66	0.64	0.24	0.24	紫紺	ガラス		469 010
図6-15	小玉A	0.38	0.51	0.49	0.2	0.2	青	ガラス		469 010
図6-16	小玉A	0.41	0.47	0.47	0.17	0.17	青	ガラス		469 010
図6-17	小玉A	0.28	0.51	0.49	0.19	0.18	青	ガラス		469 010
図6-18	小玉B	0.26	0.61	0.61	0.25	0.24	青緑	ガラス	透明度高	469 010
図6-19	小玉B	0.38	0.56	0.5	0.21	0.19	青緑	ガラス	透明度高	469 010
図6-20	小玉B	0.24	0.45	0.42	0.16	0.17	青緑	ガラス	透明度高	469 010

須恵器

挿図番号	資料名	口径	器高	底(脚)径	最大径	胎土	色調	焼成	出土位置	備考	登録番号
図7-1	杯蓋1	13.2	4.7			密	灰	良好	玄室(後室)	「玄室奥壁右隅」25	213 389
図7-2	杯蓋10	12.6	4.3			密	灰	良好	羨道	10	213 398
図7-3	杯蓋12	12.4	4.1			密	灰	良好	羨道	11 上面に「x」	213 400
図7-4	杯蓋8	12.8	4.1			密	灰	良好	羨道	12 上面に「x」	213 396
図7-5	杯蓋2	12.4	4.0			やや密	灰	良好	玄室(前室)	「玄室入口」8 上面に「x」	213 390
図7-6	杯蓋5	12.5	4.5			密	灰オリーブ	良好	羨道	9	213 391
図7-7	杯蓋9	12.6	4.4			密	オリーブ灰	良好	羨道	7	213 397
図7-8	杯蓋7	13.0	4.2			密	灰	天井部やや不良	羨道	2 上面に「x」	213 395
図7-9	杯蓋6	12.7	4.1			密	灰	天井部やや不良	羨道	13	213 394
図7-10	杯蓋11	12.1	4.0			密	灰	良好	羨道	6 上面に「x」	213 399
図7-11	杯蓋4	10.6	3.5			密	オリーブ灰	良好	玄室(前室)	「前室伏セテアリ 鉄さび八倒卵形すかし鉄ツバニ伏セタメ」13	213 393
図7-12	杯蓋3	11.0	4.2			密	灰	良好	玄室(前室)	「前壁左角 鉄鏝に伏せる」14 内面に「x」	213 392
図7-13	杯身3	10.9	3.8			密	灰	良好	玄室(後室)	「後室 No.1(上向)」底部外面自然釉 外面「-」	213 405
図7-14	杯身4	11.4	3.7			密	灰	良好	玄室(後室)	「後室奥壁右隅クボミ(上向)」24 底面に鉄鏝	213 406
図7-15	杯身5	11.6	3.9			密	灰白	良好	玄室(前室)	「前室 No.1 伏セテアリ」23 内面黒褐色	213 407
図7-16	杯身8	11.0	3.8			密	灰	良好	羨道	5	213 410
図7-17	杯身9	10.8	4.1			密	灰	良好	羨道	3	213 411
図7-18	杯身1	11.0	3.8			密	灰	良好	羨道	19	213 403
図7-19	杯身6	10.9	3.7			密	灰	良好	羨道	15	213 408
図7-20	杯身12	10.9	4.0			密	灰	良好	羨道	16	213 414
図7-21	杯身13	10.8	4.1			密	オリーブ灰	やや不良	羨道	17	213 415
図7-22	杯身2	10.6	4.2			密	灰	やや不良	羨道	20	213 404
図7-23	杯身11	11.0	4.1			密	オリーブ灰	やや不良	羨道	4	213 413
図7-24	杯身15	10.6	4.1			密	灰	良好	羨道	No.1	213 417
図7-25	杯身16	10.4	4.4			密	灰	良好	羨道	18	213 418
図7-26	杯身17	11.4	4.4			密	灰	軟質	羨道	26 27?、もと「蓋14」	213 402
図7-27	杯身14	11.5	4.1			密	灰	不良・軟質	羨道	21	213 416
図7-28	杯身10	9.9	3.8			密	灰	良好	玄室(前室)	「前室 No.3 伏セテアリ」22 内面に「x」	213 412
図7-29	杯蓋13	12.6	4.4			密	暗オリーブ灰	良好	B室	「B室 3、4に重なる」	213 401
図7-30	杯身7	10.9	4.3			密	灰	良好	B室	「奥壁1」内外面にわずかに赤色顔料	213 409
図8-31	高杯1	9.6	12.6	6.8		密	暗灰	良好	羨道		214 055
図8-32	高杯2	10.3	12.0	8.3		密	暗オリーブ灰	良好	羨道		214 056
図8-33	甕1	10.7	14.0	4.0	7.9	密	灰	良好	羨道		215 026
図8-34	甕2	11.2	14.5	3.9	8.7	密	暗オリーブ灰	良好	羨道	別個体の破片融着	215 027
図8-35	提瓶	8.5	21.5		15.6	密	オリーブ灰	良好	玄室(前室)		218 010
図8-36	平瓶	8.2	17.0	7.1	16.6	密	青灰	良好	羨道		217 024
図8-37	子持脚付壺	19.5	52.3	21.8	43.9	密	灰	良好	羨道	脚部端欠損、脚部に別個体の破片融着	210 069

円筒埴輪

挿図番号	資料名	口径	器高	底径	口縁部高	突帯間隔	底部高	胎土	色調	焼成	出土位置	登録番号
図8-38	円筒埴輪	28.0	43.9	17.2	12.6	11.9	19.4	やや粗	明赤褐	やや軟質	羨道	303 006
図8-39	円筒埴輪	29.0	41.3	20.0	14.1	12.4	14.8	密	橙	良好	羨道	303 007

